

- 1 . さて、アロンの子ナダブとアビフは、おのおの自分の火皿を取り、  
その中に火を入れ、その上に香を盛り、主が彼らに命じなかった異なった火を主の前にささげた。

וַיִּקְרְבוּ לִפְנֵי יְהוָה אֵשׁ זָרָה אֲשֶׁר לֹא צִוָּה אֹתָם:

異なる、

Hi.

嫌がられる、別の、ふるい分ける

- 2 . すると、主の前から火が出て、彼らを焼き尽くし、彼らは主の前で死んだ。
- 3 . それで、モーセはアロンに言った。  
「主が仰せになったことは、こういうことだ。  
『わたしに近づく者によって、  
わたしは自分の聖を現わし、  
すべての民の前でわたしは自分の栄光を現わす。』」
- それゆえ、アロンは黙っていた。
- 4 . モーセはアロンのおじウジエルの子ミシャエルとエルツァファンを呼び寄せ、彼らに言った。  
「進み出て、あなたがたの身内の者たちを聖所の前から宿営の外に運び出さない。」
- 5 . 彼らは進み出て、モーセが言ったように、彼らの長服をつかんで彼らを宿営の外に運び出した。
- 6 . 次に、モーセは、アロンとその子エルアザルとイタマルに言った。  
「あなたがたは髪のを乱してはならない。  
また着物を引き裂いてはならない。  
あなたがたが死なないため、  
また怒りが全会衆に下らないためである。  
しかし、あなたがたの身内の者、  
すなわちイスラエルの全家族が、  
主によって焼かれたことを泣き悲しまなければならぬ。
- 7 . またあなたがたは会見の天幕の入口から外へ出てはならない。  
あなたがたが死なないためである。  
あなたがたの上には主のそそぎの油があるからだ。」
- それで、彼らはモーセのことばどおりにした。
- 8 . それから、主はアロンに告げて仰せられた。
- 9 . 「会見の天幕には行って行くときには、  
あなたがたが死なないように、  
あなたも、  
あなたとともにいるあなたの子らも、  
ぶどう酒や強い酒を飲んではならない。  
これはあなたがたが代々守るべき永遠のおきてである。
- 10 . それはまた、あなたがたが、  
聖なるものと俗なるもの、  
また、汚れたものときよいものを区別するため、
- 11 . また、主がモーセを通してイスラエル人に告げられたすべてのおきてを、あなたがたが彼らに教えるためである。」

12 .そこで、モーセは、アロンとその生き残っている子のエルアザルとイタマルに言った。

「主への火によるささげ物のうちから残った穀物のささげ物を取り、  
パン種を入れずに祭壇のそばで、食べなさい。これは最も聖なるものであるから。

13 . それを聖なる所で食べなさい。

それは、主への火によるささげ物のうちから、  
あなたの受け取る分け前であり、あなたの子らの受け取る分け前である。  
そのように、私は命じられている。

14 . しかし、奉献物の胸と、奉納物のももとは、

あなたと、あなたとともにいるあなたの息子、娘たちが、きよい所で食べることができる。  
それは、イスラエル人の和解のいけにえから、  
あなたの受け取る分け前、またあなたの子らの受け取る分け前として与えられている。

15 . 人々は、奉納物のももと奉献物の胸とを、

火によるささげ物の脂肪に添えて持って来て、奉献物として主に向かって揺り動かさなければならない。  
これは主が命じられた通り、あなたと、またあなたとともにいるあなたの子らが永遠に受け取る分である。」

16 . モーセは罪のためのいけにえのやぎをけんめいに捜した。

しかし、もう、焼かれてしまっていた。

すると、モーセはアロンの子で生き残ったエルアザルとイタマルに怒って言った。

17 . 「どうして、あなたがたは聖なる所でその罪のためのいけにえを食べなかったのか。

それは最も聖なるものなのだ。

それは、会衆の咎を除き、主の前で彼らのために贖いをするために、あなたがたに賜わたったのだ。

18 . その血は、聖所の中に携え入れられなかったではないか。

あなたがたは、私が命じたように、それを聖所で食べなければならなかったのだ。」

19 .そこで、アロンはモーセに告げた。

「ああ、きょう彼らとその罪のためのいけにえ、全焼のいけにえを、主の前にささげました。

הֵן הַיּוֹם הִקְרִיבוּ אֶת־חַטָּאתָם וְאֶת־עֹלֹתָם לְפָנַי יְהוָה  
それでこうということが私の身にふりかかったのです。

וַתִּקְרָאנִי אֲתִי כְּאִלָּה

these as Qal. impf.

encounter, befall, meet

もしきょう私が罪のためのいけにえを食べていたら、主のみこころにかなったのでしょうか。」

וְאֶכְלֹתִי חַטָּאת הַיּוֹם הַיּוֹטֵב בְּעֵינַי יְהוָה:

20 .モーセはこれを聞き、それでよいとした。

## 説教

レビ記は、神と人との交わりのあり方を具体的に私たちに教えてくれるものです。

神さまはイスラエルと共にいてくださるのですが、

それが果たしてどのようにしてであるのか、

神さまはどのようにしてご自身を人々にあらわし、

人々はどのようにして神さまに受け入れられ、恵みを受け、神さまに願いを聞いてもらうのか、

神が共におられるということの具体的な姿、形態、あり方こそが、レビ記が私たちに伝えようとしていることなのです。

それで、前回の9章では、任職を受けた大祭司アロンとその子らの初仕事で、

彼らが、罪のためのいけにえ、全焼のいけにえ、そして和解のいけにえを捧げることで、

人々の罪が贖われ、神さまに受け入れられ、

そして神さまとの交わりに迎え入れられる

(具体的には主の晩餐に招かれ、

神と共に飲み食いして、

神さまの恵みを全身全霊をもって味わう)という、

祭司として言うならば最もやりがいのある、喜び溢れる奉仕をする場面でした。

つまり、彼らの喜ばしい奉仕を通して、神の栄光があらわれる、神さまが彼らと共におられることが明らかにされたのです。

そして、今日は、それとは全く正反対の意味で、神の栄光があらわれるという場面です。

つまり、きちんと自分の責任を果たさない祭司が神のさばきを受けて、

そのことによって神の栄光があらわれる、神さまが彼らと共におられることが明らかにされるという場面です。

恵みに於いても、さばきに於いても、神さまはご自身の栄光をあらわされます。

つまり、神が彼らと共におられるということを彼らに明らかになさるのです。

祭司としての任職が終わり、

最初のいけにえをささげる儀式を無事終えたアロン親子でしたが、それから間もなく、悲劇が彼らを襲います。

アロンの子ナダブとアビフが主の前から出て来た火で焼き殺されてしまったのです。

その原因は、彼らが「主が彼らに命じなかった異なった火を主の前にささげた」からでした。

それで神さまの怒りが彼らに下って焼き殺されたのです。

1. さて、アロンの子ナダブとアビフは、おのおの自分の火皿を取り、  
その中に火を入れ、その上に香を盛り、主が彼らに命じなかった異なった火を主の前にささげた。
2. すると、主の前から火が出て、彼らを焼き尽くし、彼らは主の前で死んだ。

彼らが「主が彼らに命じなかった異なった火を主の前にささげた」とはどういうことでしょうか。

これにはいくつかの場合が考えられます。

例えば、

彼らが祭壇からでなくどこか他の所から取って点火したことが考えられます（レビ記 16:12，民数記 16:46 参照）。

また、

9章で命じられた礼拝順序ののっとり香をささげようとしなかったからだとも考えられます。

あるいは、

入ってはならない至聖所に勝手に押し入って香をささげようとしたのかも知れません（レビ記 16:1,2）。

こうした不法を、酒に酔ってやってしまったのかも知れませんし（10:9）、

あるいは、9章で自分たちが司式した最初の儀式に主の栄光があらわれ、

主の火が祭壇のいけにえを焼き尽くすのを目の当たりに見て（9:23,24）興奮したため、

思わず何か自分が偉いことをやってのけたように勘違いして、傲慢になってやってしまったのかも知れません。

いずれにせよ、

つまり彼らが神さまに命じられなかった方法や時、

神さまに命じられなかった場所で香をささげようとしたにせよ、

彼らの問題の本質は「主が彼らに命じなかった異なった火を主の前にささげた」という一点にあります。

これが、神の怒りとさばきを招いたのです。

たかが時や場所ではないか、

ほんの僅かの違いではないか、

堅いこと言わずに少しぐらい融通を利かせてもいいではないかと言う人もいるでしょう。

あるいは、彼らとて晴れて祭司に任職されたんだし、

多少の裁量を認めてあげてオリジナルの礼拝を追求してもいいのではないかと考える人もいるかも知れません。

そして、ナダブとアビフもそう考えたかも知れません。

でも、私たちはこのことをよく記憶しておかなければなりません。

確かにどう考えるのも私たちの自由です。

でも、自分勝手にささげるあらゆる自家製の礼拝に対して、神さまは怒りと呪いを下されるのです。

思えば、自分勝手な「自家製の礼拝」ほど神さまの怒りを買うものではありません。

なぜなら、それはこの世のあらゆる偶像宗教の本質をなすものだからです。

石にせよ、木にせよ、人にせよ、「偶像」とは神ならぬものです。

そしてその神ならぬものを神とすることこそが偶像崇拜の本質です。

偶像とは、人間が「自分のために」勝手に作り出すものです。

偶像崇拜の本質は、自分勝手な人間中心の生き方なのです。

偶像自体、人間が勝手に考えて作り出したものですし、

その礼拝のあり方も、人間が、自分の都合のよいように勝手に考え出したものです。

偶像崇拜とは、神さまにあからさまに敵対し、挑戦する、反逆行為なのです。

絶対にやっちゃならんものです。

ましてや祭司が。

神の祭司たる者が。

ですから、イスラエルは神さまによく聞かなければなりませんでした。

そして、人間中心にではなく、神さまに中心に礼拝をささげなければなりません。

神さまのみことばをよく聞いて、その通りに行わなければなりませんでした。

「聞き従うことは、いけにえにまさる」(サムエル 15:22)のです。

それで、祭司の任職の際には、七日の間、毎日毎日、

自分の手で屠ったいけにえの血を自分の耳と手足の親指に塗りながら、

神さまに聞き従って生きることを、徹底的に、しかも生々しく教え込まれました。

かつては異教の宗教と風習に染まって生きてきた彼らでしたが、

一週間の聖別儀式を通して神さまに聞き従って生きることを徹底的に教え込まれたはずなのです。

それなのに、異教の風習に逆戻りしてしまったらどうなるでしょうか。

しかも、

イスラエルの人々に

「聖なるものと俗なるもの、

また汚れたものときよいものを区別し、

主がモーセを通してイスラエル人に告げられたすべてのおきてを彼らに教える」べき祭司がそうしたらどうなるでしょうか。

その影響力は絶大です。

イスラエル全体に墮落が広がります。

それで、神さまは即座に容赦なく彼らを打たれたのです。

そして、

たとえ肉親兄弟であっても、

彼らの罪と死に同情して自らも神のさばきを受けぬよう警告なさます(レビ記 10:6-7)。

そして、さらに、

今後こうしたことが起ころぬよう、「ぶどう酒や強い酒を飲んではならない」ともお命じになるのです。

祭司は神と人の間に立つ仲介者です。

いけにえをささげてイスラエルの人々のために取りなし祈り、神さまに対しては人々を代表します。

そして、同時に、イスラエルの人々に対しては、神のことばを教えて神さまを代表します。

人々に神の栄光をあらわすのです。

ですから、神のことばを曲げてはなりません。

自分で勝手にそれに付け加えたり差し引いたりしてはならないのです。

神の命令にいろいろ付け加えているうちに、

まことの神を礼拝しているのか異教の神々を礼拝しているのかわからなくなったらどうしようもありません。

まことの神を礼拝しているのか、

天照大神や八百万の神々を礼拝しているのかわからない状態では神の栄光をあらわすことはできません。

神のことばを信頼し、神のことばの通りに行っておそ神の栄光をあらわすことができるのです。

神さまは言われます。

「わたしに近づく者によって、

わたしは自分の聖を現わし、

すべての民の前でわたしは自分の栄光を現わす。」(レビ記 10:3)

### 3. それで、モーセはアロンに言った。

「主が仰せになったことは、こういうことだ。

『わたしに近づく者によって、

わたしは自分の聖を現わし、

すべての民の前でわたしは自分の栄光を現わす。』」

それゆえ、アロンは黙っていた。

「わたしに近づく者」とは祭司のことです。

神さまは、祭司を通してご自身の臨在をあらわされます。

それで、神さまは、祭司にいけにえをささげさせることで、

人々の罪を贖い、彼らとの親しい交わりを開いてくださいます。

そして、同時に、

祭司に律法を教えさせ、

祭司が罪を犯したら彼を公衆の面前で打って見せしめにして、ご自身のきよさを人々にあらわされます。

いずれにせよ、

神さまは、

祭司を通してご自身の恵みとみこころとを人々にあらわされます。

そうして、ご自身が彼らと共におられることを示されるのです。

12 節以降を見ると、アロンとその子らの食べるべきささげ物について記されます。

「あなたと、またあなたとともにいるあなたの子らが永遠に受け取る分である」 (15 節)

しかし、16-18 節を見ると、

それをアロンとその子らが食べなかったということを「何で食べなかったか」とモーセが叱責します。

19節を見ると、アロンが弁解します。

要するに、自分の身内が神さまに打たれたので、恐れて、これを食べて良いものかとためらったというのです。

これが神のさばきをもたらした結果です。

つまり、神がご自身のさばきを下された結果として、

アロンもその残りのふたりの子どもたちも、神を恐れるようになったのです。

そして、「どうしたらいいか」と神のことばにひとつひとつ聞くようになったのです。

私たちも同じではないでしょうか。

神さまは私たちと共におられます。

でも、神さまが私たちと共におられるということの意味は、二つの意味を同時に理解しなければなりません。

ひとつは、神さまに罪赦されて受け入れられた喜びの中にあるということです。

そして、もうひとつは、神さまが、ご自身の鉄のムチをもって、私たちにご自身の御心を教えてくださるということです。

神さまは、私たちを、限りない憐れみによって愛して、受け入れて、祝福してくださり、

同時に、私たちに、歩むべき道を教えてくださるのです。

これが、神が私たちと共におられるということの意味です。

神さまの恵みを受けたら、神さまのみこころを行うようになります。

私たちは、神さまの恵みを受けたら、ナダブとアピフのように傲慢になって勝手に生きるのではなくて、

いよいよ神さまを畏れて、みこころを行うようにならなければなりません。

神が私たちと共にいてくださる、

この恵みをかみしめながら、

今週も、私たちが、神さまを信じ、

喜びと感謝をもって、神と人に仕え、神の栄光をあらわして生きていくことができるよう祈ります。